

「『無関心』からの脱却」

秋田県 湯沢市立皆瀬中学校 2年 佐藤 俊輔<sup>きとう しゅんすけ</sup>

この世で一番怖いものとは？そんな質問をされたら、みなさんはどう答えるだろうか。この質問に対し、僕は「無関心」だと答える。人々の「無関心」ほど怖いものはない。僕はその怖さを広島市の土砂災害で知った。

今年の8月。この年の夏は長雨続きであったことを僕ははっきりと覚えている。また、この年は日本の広範囲で雨量が多い月であった。

僕が今年の天気のことを記憶しているのには理由がある。それは僕が野球部に所属しているからである。夏休み中の野球練習を阻む雨を僕は少しイライラした気持ちで見ている。しかし、この雨は広島でたくさんの人の命を奪う雨にもなったのである。

8月20日の未明、広島市の安佐南地区と安佐北地区は局地的豪雨となった。そしてその豪雨により、この地区は土砂災害が発生してしまったのである。

僕はこのニュースに強い衝撃を受けた。それというのも、この土砂災害による犠牲者があまりにも多かったからである。ニュースによると、死者が75名、そして約50名の方が負傷したそうである。国土交通省の発表によると、土砂災害による人的被害としては過去30年間の日本で最多であるそうだ。一瞬にして尊い命が奪われたのである。

テレビの画面に映っている被災地は大変な状況だった。先ほどまでそこが住宅地だったことが想像できないほどだった。

大量の泥の中を懸命に捜索活動を行う自衛隊とそれを見守る住人たちの姿が映し出されていた。その姿を見て、僕は気の毒に思った。また、亡くなった方に花を置いて手を合わせながらずっと泣いている遺族の姿を見て悲しく思った。そして、泥の上に置かれた花の色の鮮やかさが今でも記憶に残っている。それほど僕にとって土砂災害の被災地は衝撃的な映像であった。

土砂災害の被災地の様子を見て、僕は自分の住んでいる所はどうだろうかと思った。それというのも、僕の家は山を背後に背負った場所に位置しているからだ。しかし、僕の家は山から100メートル以上も離れている。広島市のような大規模な災害を被ることがあるのだろうか。

僕は親に聞いてみた。すると、「家まで土砂はくるよ。家も無くなる。」と即答した。僕は驚いてしまった。それと同時に、僕達の生活は常に危険と背中合わせになっていることを知った。また、「絶対」ということはこの世に無いことも知った。

広島市の土砂災害のニュースは被害が起きてから、連日のように報道されたが、その後は少しずつ縮小していった。そして、1ヶ月後、1年後という具合に間をおいて取り扱われるようになった。しかし、被災地の人達には、土砂災害が起きてから、今現在までずっと苦しみが続いているのである。それは醒めることのない永遠の悪夢だとも言える。

一瞬のうちに今の自分の命が、生活が奪われる土砂災害はとても恐ろしいものだ。しかし、僕達はそれを他人の出来事としてとらえていないだろうか。それどころか土砂災害は自分には関係ない、自分は大丈夫など確信めいたものをもって生活しているのではないだろうか。そうした人々の災害に対する「無関心」が大きな災害へつながっていくのではないかと僕は思う。実際、僕もそうだった。今年の土砂災害の事故現場を見て、初めて土砂災害の恐ろしさに気づいたのである。そして、自分の住んでいる場所の危険箇所について親に確認したくらいだ。

しかし、自然災害について僕達はそうした「受け身的」な考え方でよいだろうか。無関心な態度でよいのだろうか——決してそうではないはずだ。

自分の命を自分で守る——そのためには自分の住んでいる地区の危険箇所について、確認し、それに対して何かしら対応していかなければいけないと思う。災害について準備をして心構えがあると、何かあってから慌てるのでは、非常時に対応が違ってくるはずだ。また、助かる可能性も高くなるはずだ。

実際、東北大震災の時も自分の判断で自分の命を守った小学生達の話がある。それは今「釜石の奇跡」と呼ばれている。釜石の防災教育で指導された片田敏孝先生の話によると、自らの命を主体的に守る「姿勢」をもつことはとても重要だそうだ。土砂災害についても同じ事がいえるのではないだろうか。

自然災害はいつ、どこでおきるのか分からない。また、その自然災害の規模の大きさは計り知れない。だからこそ普段から僕達は自分の身のまわりの危険について知るべきであるし、どう対応するべきかも考えておく必要がある。世の中で一番怖いのは災害に対する「無関心」なのだ。